

カンキツのゴマダラカミキリ防除対策

佐賀県果樹試験場 病害虫研究担当 係長 衛藤 友紀

今月は、主にカンキツで問題となる「ゴマダラカミキリ」の防除対策について説明します。本虫の生態については本誌2019年6月号に掲載していますので、そちらをご覧ください。

発生の概要

近年、ゴマダラカミキリの発生および被害が目立ちます。要因の1つとして、管理が行き届いていない放任のミカン園が多くなり、そこが発生源となっていると考えられます。

また、近年の温暖化、多雨等の気象条件も発生消長に影響を与えているようです。2020年は梅雨明けが遅く、また防除時期にあたる7月に集中豪雨があったこともあり、防除のタイミングを逃したり、せっかく薬剤散布をしたのに、有効成分が流されてしまい、防除効果が得られなかったため、成虫の防除がうまくいかず、樹幹に侵入した幼虫が多かったものと推定されます。

さらに、2021年は、樹幹で越冬した幼虫が多かったことから、当然発生してくる成虫も多く、さらに暖冬傾向であったことから、発生時期も平年（5月下旬～6月上旬）より早く、園地によっては5月中旬頃にはみかけることもあり、薬剤防除が例年より早まったのではないのでしょうか。

本虫の防除としては、交尾する、卵を産み付ける「成虫＝雌雄」を対象とする場合、被害が問題となる「幼虫」を対象とする場合に分けられます。

防除対策

耕種的防除

最も簡単な方法は捕殺です。摘果等の普段の



写真1 ゴマダラカミキリ成虫

管理をしている際に見かけたら、必ず捕殺します。ちなみに、気温が低い早朝にゴマダラカミキリがいる樹を揺さぶると、落下して、捕まえやすく、気温が高まる午後に揺さぶると飛翔するので、早朝に園地を見回りながら、捕殺して下さい。また、品種更新により、幼木が定植されている園地も多いと思います。成木以上に被害が深刻となるので、防除を徹底します。写真のような防虫ネット等を巻き付けて成虫の産卵を抑制することも大切です。

幼虫が樹に侵入した場合も捕殺します。産下された小さな卵を探すことは難しいので、幼虫の食害の目安となる「木屑」を見つけたら、幼虫を潰します。幼虫を潰す道具として



写真2 産卵抑制のための防虫ネット

は、経験的に「マイナスドライバー」と「クリーニングの鉄製ハンガー」が便利です。ドライバーは鋭利で、強度がありますので、樹皮を削る際に役立ちます。一方、ハンガーも強度があり、また形を自由に変えることが出来るので、木質部の奥深く侵入した幼虫を潰す際に役立ちます。また、成虫は地際部に産卵する傾向があります。地際部の様子が分かるように除草も大



写真3 幹から溢れ出た木屑等

切です。

先述したように、放任園はゴマダラカミキリだけではなく、黒点病の発生源にもなることから、地域全体の問題としてとらえて、対策を講じる必要があると思われます。

薬剤防除

昨年、ゴマダラカミキリ成虫を対象に薬剤に対する感受性を検定しました。対象薬剤は本県の病虫害防除のてびきに掲載している薬剤です。①直接薬液に浸漬する試験（接触毒性、図1、3）と②カンキツ枝葉を薬液に浸して、その枝葉を餌として与えた試験（経口毒性、図2、4）です。死亡率が高いほど防除効果が期待できます。各薬剤の結果は以下の通りです。ダントツ水溶剤 2,000～4,000倍（図1～4）は、接触・経口毒性ともに高いことから、防除薬剤として期待できますが、モスピラン SL 液剤の場合、4,000倍（図1～2）より、効果が高い

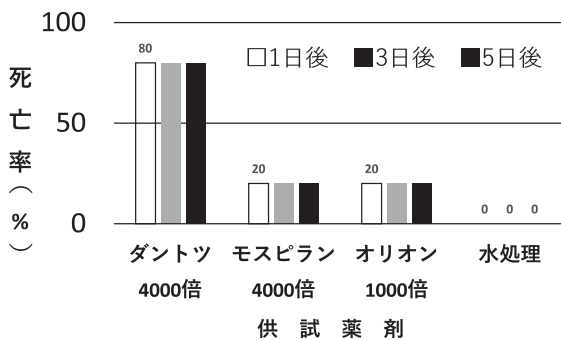


図1 ゴマダラカミキリ成虫に対する各種薬剤の殺虫効果 (虫体浸漬法、2021年6月8日)

注) 供試薬剤：ダントツ水溶剤、モスピラン SL 液剤、オリオン水和剤 40。

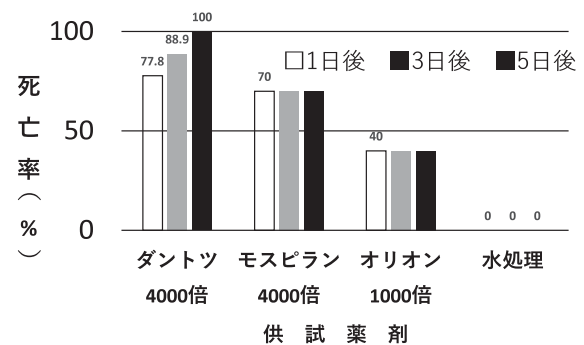


図2 ゴマダラカミキリ成虫に対する各種薬剤の殺虫効果 (食餌浸漬法、2021年6月8日)

注) 供試薬剤：図1に準ずる。

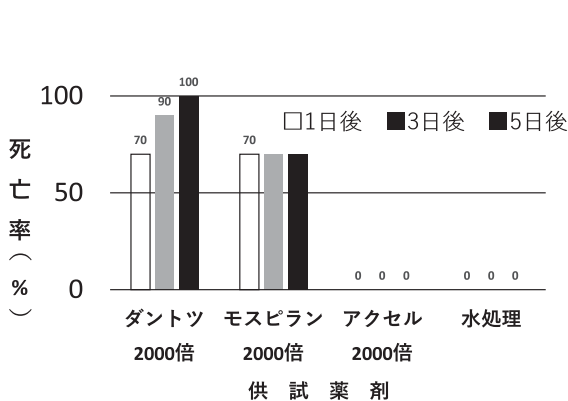


図3 ゴマダラカミキリ成虫に対する各種薬剤の殺虫効果 (虫体浸漬法、2021年6月16日)

注) 供試薬剤：ダントツ水溶剤、モスピラン SL 液剤、アクセルフロアブル。

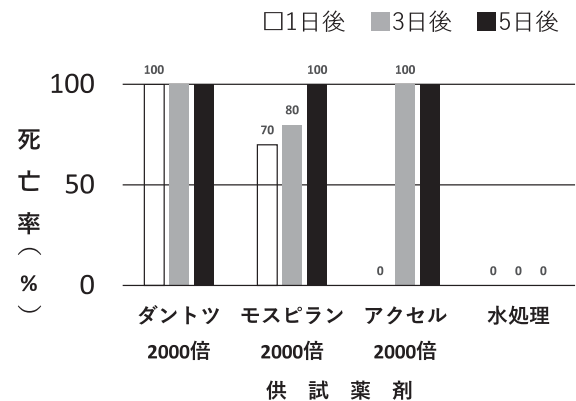


図4 ゴマダラカミキリ成虫に対する各種薬剤の殺虫効果 (食餌浸漬法、2021年6月16日)

注) 供試薬剤：図3に準ずる。

2,000倍（図3～4）の使用が望ましいと考えられます。また、アクセルフロアブル2,000倍は接触毒性（図3）は低いものの、経口毒性（図4）が高く、防除薬剤として期待できる一方で、オリオン水和剤40（図1～2）は両毒性ともに低く、防除薬剤としては効果不足です。

一昔前まではスプラサイド剤等の有機リン剤が主に使われていましたが、他剤と比較して残効が短いことに加え、感受性が低下している事例もあることから、本系統薬剤のゴマダラカミキリ防除剤としての使用は控えます。このようにして今後も検定を行い、その結果を基にてびきを改善していく予定です。

いずれの薬剤でも、本虫防除に関しては、成虫が薬液に直接接触することは少なく、餌となる植物を介して殺虫効果を発揮すると思われるため、薬剤散布は散布ムラのないように実施することが重要です。また、重要な防除時期が梅雨期に当たるので、薬剤散布後に急な降雨がないように、天気予報で情報を収集することは大切です。さらに、自分の園地でどのような害虫が

発生しているのか、よく観察するとともに、ゴマダラカミキリと同時防除できる害虫を考慮して、薬剤の選択を行います。

幼虫防除としては、一般家庭でも馴染みのある「噴霧剤」が登録されています。商品名は「ロビンフード」、「園芸用キンチョールE」です。使用する際は、幼虫に可能な限り近づけるように、先述の幼虫食入の目安である「木屑」をきれいに取り除き、ノズルを食入口深く挿入して、噴霧します。

.....

現在、生産現場からの要望課題としては、ゴマダラカミキリ以外にも、カイガラムシ類に対するスプラサイド剤の代替薬剤について、依然として問題となっているチャノキイロアザミウマの防除対策について等が挙がってきています。当场では、これら問題を解決するために現地ほ場で様々な試験を実施しています。少しでも早く解決策を見出し、情報提供できるように努めたいと考えていますので、今後ともご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。